

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】全 惠松

【所属】(助成決定時) 神戸大学大学院国際文化研究科博士後期課程

【研究題目】日本植民地期前後の済州島における仏教復興

—蓬廬^{ボンリョクワン}観比丘尼(1865-1938)と観音寺の役割及びその評価をめぐって—

【研究の目的】(400字程度)

本研究で取り上げる観音寺は、済州島の漢拏山の中腹にあり、大韓仏教曹溪宗第 23 教区本山とされ、済州島にある曹溪宗所属寺院 42 箇寺を統括している。その観音寺は、1908 年、蓬廬観という一人の比丘尼によって建立された。蓬廬観比丘尼は、200 年余り仏教が途絶えた 20 世紀初頭の済州島で仏教の復興に大きく貢献した人物である。20 世紀初頭の済州島における仏教復興と蓬廬観比丘尼が果たした役割は、近現代韓国・朝鮮宗教史研究における重要なテーマでありながらこれまで研究されていない。反呪術的啓蒙主義や「反日」史観が支配的な韓国社会・韓国仏教界では、呪術的傾向の強かった当時の仏教や、朝鮮総督府による法要等に関与していた蓬廬観比丘尼に対し、かなりの偏見があったものと考えられる。本研究では、植民地統治下の済州島民の精神的・宗教的需要を公平な視点でとらえ、関連史料に当たることから、蓬廬観比丘尼と観音寺の役割について考察を行い、済州島仏教の歴史を明らかにしていきたい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究ではまず 200 年余り仏教が途絶えた済州島にどのようにして仏教が復興したのかを論じる前提として、朝鮮時代末期から日本統治期に入る時期の政治・社会情勢に着目した。金允植(1835~1922)の済州島流刑中の日記(1897 年 - 1901 年)である『続陰晴史』、朝鮮総督府の『普天教一般(秘)』(大正 15 年)、総督府発行の調査報告書『朝鮮の類似宗教』(調査者:村山智順 1935 年)、『生活状態調査—水源・済州島編』(調査者:善生永助 1929 年)、普天教の機関誌『普光』(1923 年~)、甑山教の経典である『甑山道道典』等の関連史料・文献の分析を通して、朝鮮王朝の政治的権威の失墜は、済州島と済州島の民衆にどのような影響を与え、それがどのようにして仏教復興に結びついていったのかについて、考察を行った。とりわけ、当時、済州島で起きた多数の民衆反乱に共通する原因となっていた租税制度の問題について取り上げ、また、機能不全に陥った制度に抵抗する民衆運動としての性格をもった新宗教の興隆について検討した。

次は、蓬廬観比丘尼による済州島仏教復興の初期の様子について、口伝説話、済州島で布教僧として活躍したイ・フェミョン(李晦明)(1866-1951)が残した記録である『晦明文集(1926~1951)』、同時に刊行された新聞の中から蓬廬観比丘尼および済州島の仏教に関する記事を批判的に検討しながら分析を行った他、観音寺をはじめとする蓬廬観比丘尼と関係の深い寺院の住職、李晦明(イ・フェミョン 1866-1951)を恩師とする門中の弟子たちに、李晦明と蓬廬観比丘尼の仏教布教について聞き取り調査を行った。(場所:済州島)また、蓬廬観比丘尼の孫弟子に、師であるソンヘ比丘尼の蓬廬観比丘尼との出会いから出家、また当時の修行内容について聞き取り調査を行った。(場所:全羅南道、又松寺)

【結論・考察】(400字程度)

朝鮮王朝末期から日本植民地統治への移行期にかけて、混乱を極めていた済州島の社会・政治・経済情勢と新宗教の興隆について検討をした。とりわけ、過度な徴税を可能にする租税制度と西洋列強との摩擦が大規模な民乱を引き起こし、朝鮮王朝の政治的権威の失墜をまさに象徴していた。

さらに、1901 年に起きた民乱は、西洋宗教とフランスという帝国主義の力が島の住民たちにとって大きな脅威であるというイメージを植え付けた。また、これらの大きな脅威の前に、済州島民が従来、信仰してき

た土着の宗教にはない、新しい威力を持った宗教を求めようになったと考えられる。こうした背景のもとで、南学や普天教を中心とする新宗教は、済州島で布教を拡大していったのである。1860年、儒教・仏教・道教の教えを合わせた教理を持つ「東学」が創始され、その後、東学とそれと類似した民族新興宗教が朝鮮半島の南地方を中心に布教を拡大した。特に、南学や普天教の中に取り入れられていた道教と混交した仏教の要素が済州島の島民に非常にアピールした。そして新宗教が取り込んでいた呪術的色彩の濃い仏教実践の形態に接したことがきっかけで、蓬廬観比丘尼が大伝統としての仏教を希求し、済州島での仏教復興へとつながっていたと考えられる。